

消化器癌術後の漢方薬投与が在院期間および医療費に及ぼす影響: Diagnosis Procedure Combinationデータベースを用いた25万例の検討

小西孝明^{1,2}、康永秀生²、角田幸子¹、村尾有香¹、森園亜里紗¹、山下智¹、笹原麻子¹、佐藤綾花¹、西岡琴江¹、田辺真彦¹、瀬戸泰之^{1,3}

- 1) 東京大学大学院 医学系研究科 外科学専攻 乳腺・内分泌外科学
- 2) 東京大学大学院 医学系研究科 公共健康医学専攻 臨床疫学・経済学
- 3) 東京大学大学院 医学系研究科 外科学専攻 消化管外科学

【背景】消化管蠕動低下は腹部手術の主要な合併症の一つであり、術後回復を遅延させうる。大建中湯などの漢方薬が蠕動改善に有効であるとされるが、消化器癌術後経過への影響は明らかでない。

【方法】厚生労働科学研究班のDiagnosis Procedure Combinationデータベースを用いて、2012/4~2021/3に結腸・肝・尾側膵悪性腫瘍切除術を施行され、術後3日以内(曝露期間)に経口摂取を再開した250,524例を特定した。曝露期間に大建中湯・六君子湯・小建中湯・桂枝加芍薬湯・桂枝加芍薬大黄湯を処方された48,464例(漢方群)と、処方のない202,060例(対照群)に分けた。患者背景や治療内容等を調整し、さらに未測定交絡の影響を除くため施設選好率による操作変数法を用いて、2群間で術後在院日数・総入院費用・術後死亡を比較した。

【結果】全体の術後在院日数は中央値10(四分位範囲, 8-14)日、総入院費用は133(119-151)万円で、術後死亡は1,021例(0.4%)に発生した。漢方群では対照群よりも結腸癌、腹腔鏡手術が多かった。操作変数法において、漢方群で入院期間が0.2(95%信頼区間, 0.1-0.4)日短く、総入院費用・術後死亡は両群で有意な差がなかった。

【結論】消化器癌術後の漢方薬投与は短い術後在院日数と関連する一方、総入院費用・死亡を増加させていなかった。術後早期の漢方薬は、安全に術後の消化管蠕動回復を促し、わずかながら在院日数の短縮に寄与した可能性がある。

要望演題(口演), 領域横断: 消化器手術におけるERAS